

寺院

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45175

9. 寺院

濱 耕 平

1. はじめに
2. 各寺院の概要
3. 各寺院の年中行事
4. 各寺院の組織
5. 主寺と下寺
6. 法華寺における祠堂経
7. 字柳田の寺院の問題
8. おわりに

1. はじめに

能登は、「真宗大国」とも呼ばれ、浄土真宗を中心に信心深い人が多く、寺院の数も多い。この報告書の中では、その中でも旧柳田村、現在の字柳田の中にある、光栄寺、仏性寺、法華寺の三つの寺院について記述する。この三つの寺院は、調査対象地区内にあり、現在も住職が常駐している寺院、という条件を基準として選んだ。他の調査地区内にあるという寺院に関しては、現在では寺院が移転している、住職が別の地域に住んでおり、他の寺院と掛け持ちで管理している、という理由から、調査対象外とした。

2. 各寺院の概要

2.2 光栄寺

『柳田村史』(1975:1228-1229)によると、光栄寺は浄土真宗大谷派の寺院である。大正4(1915)年に火災にあい、本尊以外の古い記録は消失しているため、開基年代は正確には不明で、寺号下付は大永3(1654)年となっている。住職であるAさん(石井、50歳、男性)によると、もとは天台宗であり、寺自体の開基は1490年とされているそうだ。火災の際には、檀家からの寄付で



写真1 光栄寺外観 (2015年12月20日、筆者撮影)

本堂を再建しているという。現在の住職で17世である。

2.2 仏性寺

『柳田村史』(1975:1237)によると、開基となった賢覚が、光栄寺の講世話人として数代にわたった功績により、設立に至った。光栄寺を「本坊」とし、仏性寺はその「地中坊」に当たる。現在はそれぞれ「主寺」「下寺」と呼ばれている。住職であるBさん(石井、67歳、男性)によると、仏性寺自体は檀家を持たず、光栄寺と共有に近い状態にあるという。

基本的には光栄寺の檀家の方が、仏性寺にも同じように参るそうだ。また、仏性寺は能登教区内の第八祖に属しており、仏性寺の住職が現在三期目の副組長を務めている。任期は3年。現在の住職が第何世かは、不明だという。

2.3 法華寺

『柳田村史』(1975:1218-1219)によると、法華寺は真言宗の寺院で、栄範法印を開基とし、承和元年(834年)建立。秘仏薬師如来を本尊としている。第一世と第二世の間に大きく開きがあり、再興したのは大永4年である。住職であるCさん(日詰脇、50歳、男性)によると、住職は代々内弟子として入った者に引き継がれていたが、現住職の祖父の代から、世襲となっているそうだ。国の重要文化財である、不動明王座像が安置されており、専用の蔵が建てられている。現在、Cさんの代で28世。



写真2 仏性寺外観(2015年12月21日、筆者撮影)



写真3 法華寺前門(2015年8月23日、筆者撮影)

3. 各寺院の年中行事

この節では、各寺院の住職への聞き取りをもとに、年間行事の時期と内容について記述する。

3.1 光栄寺の年間行事

1月1日 年頭参り

檀家の方が、光栄寺に新年のあいさつに来る。以前は、1日2日にあったが、現在はほとんどの

檀家が1日に来るため、2日には来ないそうだ。また、火災にあった光栄寺の再建の際に、特に多く出資した当時の名士の家には、毎年光栄寺、仏性寺の住職が直接感謝のお参りに向かうそうだ。

2月初め トキハジメ

年頭参りとは逆に、光栄寺の住職から檀家の家をあいさつに回る。雪解けの季節に行われることから、トケハジメとも呼ばれる。

3月20日 彼岸の中日

檀家が光栄寺に集まり、お参りをする。かつては1週間かけて行われていたが、現在の住職の兼業の関係から、現在は1日で行われる。

7月第一週の金・土・日 祠堂経

その年に亡くなった方の永代供養のための行事。檀家が光栄寺に参り、膳が振る舞われる。その際には、光栄寺の世話役が各檀家を回り、祠堂袋と呼ばれる袋を配る。そして祠堂経の際に、その袋に檀家が米を入れて持参する。Aさんによると、以前は檀家のほとんどが農家であったため、米を納める家が多かったが、最近では米を作らなくなり、現金で納める家も増えているそうだ。

9月23日 秋の彼岸

3月に行われる彼岸と同じく、檀家が光栄寺に集まり、お参りをする。その後、報恩講に備えて、仏具を掃除する「仏具磨」が、檀家の人たちにより行われる。

10月第一週の金・土・日 報恩講

11月28日に亡くなったとされる親鸞の供養をするための行事。光栄寺に檀家が集まり、お参りをする。その日程は寺によって異なる。また、報恩講後には、オトリコシと呼ばれる門徒報恩講が行われ、光栄寺、仏性寺の住職が、檀家を回りお参りをする。檀家数によってかかる日数は異なるが、光栄寺の場合は約二ヵ月かかるそうだ。

昔は光栄寺が保育園を経営しており、その当時は毎年、釈迦の誕生日であるとされる4月8日には、花まつりが行われていたそうだが、行政により保育所が設立されたときに保育所の経営を

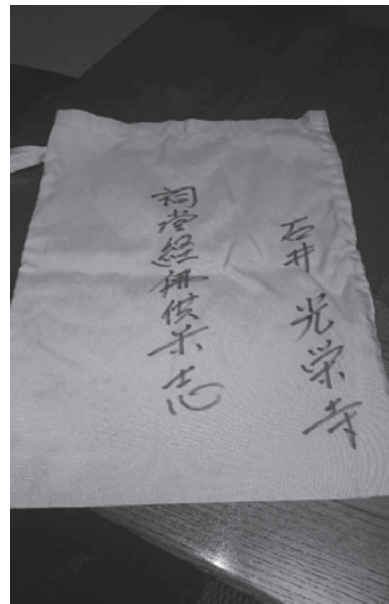


写真4 祠堂袋
(2015年12月20日、筆者撮影)



写真5 当番の分担表
(2015年12月20、筆者撮影)

やめ、それ以来行われていないそうである。

本来、報恩講は一週間の期間で行われるが、住職の兼業の関係で、日数を省略して行われている。彼岸、祠堂経、報恩講の際には、光栄寺にある、普段の台所とは別の講専用の台所で、檀家の方々により料理が作られ、ふるまわれる。この担当は檀家のいる在所ごとの持ち回りで、毎年変わる。また、それぞれの行事に、毎年持ち回りで担当の在所が決められる。

3.2 仏性寺の年中行事

1月4・5日 祠堂経

1月6・7・8日 報恩講

仏性寺で行われている行事はこの二つのみで、基本的には仏性寺は光栄寺の行事を手伝う形で行事に参加している。祠堂経と報恩講の内容は、主に光栄寺で行われていることと同じであるが、仏性寺での報恩講では寺から門徒に膳はふるまわれず、祠堂経においては、その年祠堂に入る門徒の家族には、業者に注文して仕出しがふるまわれる。この膳は、4年ほど前までは光栄寺と同じく門徒が集められ、作られていたが、高齢化や門徒の減少に伴って行われなくなった。

3.3 法華寺の年中行事

法華寺には、それぞれの檀家の位牌が安置されており、Cさんによると、檀家の人々が法華寺を参る時は、その位牌を参り、掃除などをするそうである。

1月 年頭参り

大晦日から年明けにかけて、檀家の人々が法華寺に参りに来る。

3月 彼岸

法華寺に位牌を持つ檀家が、参りに来る。住職による、読経、説法が行われる。

8月 お盆参り

法華寺に位牌を持つ檀家が、参りに来る。住職による読経が行われる。

9月 彼岸

3月の彼岸と同じ内容が行われる。

10月 祠堂経

その年に亡くなった人物の、永代供養を願って経を上げる。

Cさんによると、お盆、祠堂経の際には、地域の檀家の手伝いで膳が用意される。その手伝いは、家ごとに一人ずつ出される。以前は、講というグループが作られ、行事ごとに持ち回りで手伝いをしてもらっていたが、檀家の高齢化や檀家数の減少などに伴って、在所ごとの檀家をお願いするようになったそうだ。

過去には、毎月21日（弘法大師が即身仏になったとされる日）にお参りが行われていたが、檀家の高齢化、減少に伴い、行われなくなった。

4. 各寺院の組織

4.1 光栄寺、仏性寺の組織

光栄寺、仏性寺の檀家組織は、真宗大谷派の本山で定められたものであり、同じ宗派であることから、その組織も同じであるため、同じ節で記述する。

門徒総代 5人 任期2年 寺の行事に関する日程調整などを、住職とともにする役職。

世話役 9人 任期2年 葬儀や行事の際に、受付などその手伝いをする。門徒の中から、住職に選ばれる。

Aさんによると、任期は2年となっているが、経験の多さから同じ人に何年も頼むことが多いそうだ。光栄寺と仏性寺では、役職を掛け持ちしている人もいるが、そうでない人もいる。また、基本的に役職は世襲という場合が多く、役職を持った人がなくなればその子供に依頼することが多いが、中には知識不足などを理由に断る人も増えているそうだ。以前は名誉職として考えられていたが、現在ではそういう意識はなくなっているという。

檀家のみで作られている組織は存在しない。

4.2 法華寺の組織

講

葬式などの際の相互扶助のための組織。以前は、行事の際の手伝いも、この講毎に、毎年持ち回りで行われていた。「お講の班」と呼ばれている。

現在は、行事の際には特定の講ではなく、在所ごとの檀家が手伝って行事を行っている。

5. 主寺と下寺

この節では、仏性寺の概要でも記述した、光栄寺、仏性寺の「本坊」「地中坊」という関係性について記述する。

前述の通り、仏性寺は元々光栄寺の講の世話寺としておかれている。Bさんによれば、これは寺の講世話人が、法人格としての寺を持った状態であり、寺の役割と、世話人としての役割を併せ持ったものであるという。この制度は、能登以外ではあまり見られないものだが、現在では檀家数の減少などにより、同じ地域での寺院経営の維持が難しく、本坊と地中坊の関係を解消し、新しい檀家を求めて移転する寺院も増えているという。その関係性やそれぞれの役割は、各寺によって異なるため、この節では光栄寺、仏性寺の関係性について記述する。

仏性寺は、基本的に光栄寺の行事のほとんどを手伝い、講などがあれば、光栄寺まで赴き読経する。仏性寺の住職は、朝のお勤めとして毎朝光栄寺で読経も行う。また、光栄寺の檀家の葬式、通夜の際には、光栄寺、仏性寺の両住職が赴くそうだ。寺によっては、通夜には下寺しか来ない、ということもあるそうで、実際光栄寺の前住職の時には、通夜には仏性寺の住職のみが出席して

いたが、現在の住職になり光栄寺の住職も出席している。彼岸の際にも、読経などは光栄寺で行うが、檀家のお参り自体は光栄寺、仏性寺の両方に参る、という人が多いようだ。また、仏性寺は光栄寺の行事の手伝いだけでなく、他の地中坊を持たない寺の住職から依頼を受け、その寺の行事の手伝いをする事も、毎年5回から6回程度はあるようだ。また、他の寺院が移転したり、廃寺になったりという理由から、所属の寺院がないということで葬式などを仏性寺に依頼する人もいる。全体として、光栄寺の行事には必ず仏性寺がかかわるが、仏性寺の行事に必ずしも光栄寺がかかわるわけではない、ということだ。基本的に、光栄寺と仏性寺の関係性は変わっていないようだ。

6. 法華寺における祠堂経

この節では、法華寺において2015年10月18日に実際に見学した祠堂経について記述する。祠堂経とは、過去一年において亡くなった方の永代供養のための行事である。また、依頼によってはその年以前に亡くなった方の供養も行ふ。地域の真言宗のお寺が13社集まって（町野郷結集という）、10～11月に、毎週それぞれのお寺で行われている。

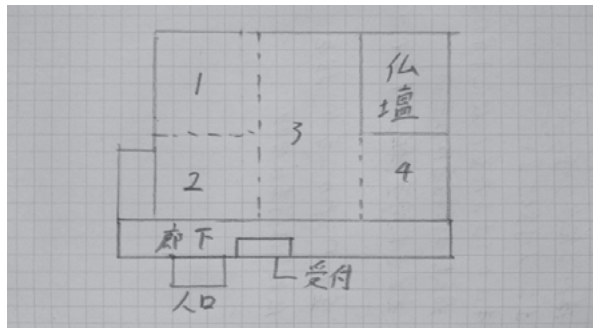


図1 法華寺の間取り（筆者作成）

右の図は、法華寺の大まかな間取りである。3の部屋の奥が、住職たちの控室となっており、3には参加者のための椅子が並べてあった。また、1の部屋の奥に台所があり、地域の檀家の方が食事の準備を行っている。

早朝 受付開始

入口から見て右側にある受付においては、供養を依頼した檀家から「蠟燭代」と呼ばれるお金が納められ、供養される人物の氏名、没年月日などが伝えられる。「坊守」と呼ばれる住職の奥さんや、手伝いを頼まれた地域の檀家の人が、受付で「経木」（卒塔婆を簡略化したもの）に、名前や没年月日を書き込んでいる。この時の名前は、俗名の場合も、戒名の場合もある。供養してもらう檀家の中には、事前に申し込む人もいるが、当日に申し込む人も多く、その日は朝6時ごろから準備を始めていたようだ。今よりも参加者が多かったときは、前日から用意を始めていた時もあったという。

09:50 般若心経が読み上げられる

地域の檀家の婦人会で、御詠歌を詠うグループがあり、そのグループによって般若心経が唱えられる。この婦人会には、固有の名称はないが、集まって御詠歌の詠唱の練習をするそうである。女性たちは、全員同じ着物を着て、道具をそれぞれ持参してきている。御詠歌を詠う方々は、図1の4の場所に座っていた。

10:00 経木供養

初めに般若心経が唱えられ、その日集まった住職の一人により、経木に書かれた、供養される人物が読み上げられる。経木を読み上げる間にも受付では新しく名前が書かれるので、そのたびに新しい経木が追加されていく。途中何度か、合間に御詠歌が詠われ、また読み始められる。参加者は少しずつ用意された席に着き始めるが、全体的には席についていない人も多く、終わりにかけて席が緩やかに埋まっていた印象だった。

11:00 経木供養終了

途中で住職が交代するようなことは無く、全ての経木を読み上げた段階で、最後にもう一度御詠歌が詠われ、

経木供養は終了となる。受付の方も当日の経木の枚数などは数えておらず、最終的な枚数は不明。

11:15 昼食

用意された精進料理を、「図1の1、2」場所で参加者が食べる。食事は、午前中から地域の檀家の女性によって用意されている。人数が当日にしかわからないため、常に手伝う檀家の方が人数を数えながら用意していた。担当は、町野郷結集の地域の、持ち回りで交代する。手伝いは、檀家からそれぞれ一人、男性か女性かを指名され、男性の場合は受付など、女性の場合は料理の準



写真6 経木供養の様子
(2015年10月18日、筆者撮影)



写真7 膳の内容 (2015年10月18日、筆者撮影)

備を手伝う。

内容は、写真7の通りであるが、他にも地域の人々が持ち寄った漬物の盛り合わせ等もふるまわれた。

12:00 梅佳代さんによる講演会

本来なら、この時間には法話などが行われる。最近では、外部から人を招いて説法などを行っているようである。今回は、柳田出身の写真家である梅佳代さんが招かれ、自身の撮影した写真をスライドに映しながら講演を行った。御詠歌を詠っていた方々は、この時間を利用して図1の1で食事をする。

13:00 講演会終了

終了とともに、法華寺の住職によりお参りをする家の名前が読み上げられる。参加者の中には、講演会終了後、お参りはせずに帰る人も多い。

13:15 お参り開始

各寺の住職は、紫の着物に黄色の袈裟に着替え、10人で仏壇を囲み、経を唱える(今回は9人で行われていた)。また、途中では中心に座る人物を除く全ての住職が、仏壇の周りを立って歩きながら経を唱える(回り経という)。

13:30 施餓鬼開始

祠堂、永代祠堂に入る家の施主の名前が読み上げられ、お参りに来た人が施餓鬼の作法を行う。施餓鬼の作法とは、炊かれた白米、生米と刻んだ野菜を混ぜた椀、水が、それぞれ入った三つの椀を用意し、水の入った椀に、他の二つの椀のものを移すもの



写真8 講演会の様子
(2015年10月18日、筆者撮影)



写真9 回り経の様子
(2015年10月18日、筆者撮影)

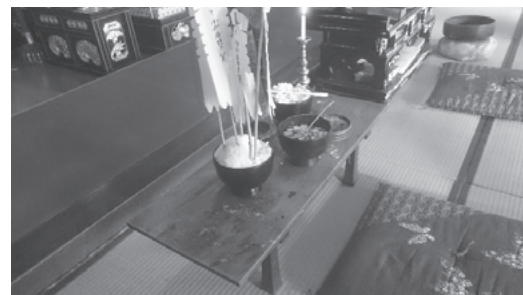


写真10 施餓鬼に使われる道具
(2015年10月18日、筆者撮影)

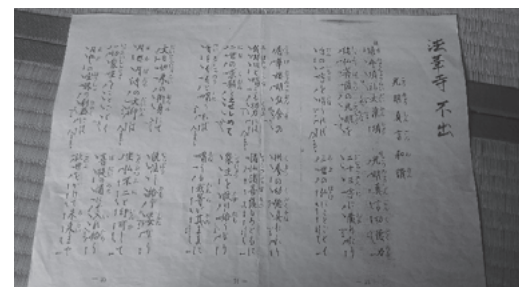


写真11 光明真言和讃
(2015年10月18日、筆者撮影)

である。その間、施餓鬼を行わない人は焼香を上げる（三つの椀のものを混ぜたものは『ダダメ』と呼ばれる）。これは、餓鬼に対して施しを行い、徳得るという意味がある。この場合の餓鬼とは、餓鬼道に落ちた鬼を指すのに加えて、それまでに亡くなった人を一般的に差す言葉としても使われ、それに対しても施しを行うという意味がある。ダダメは本来、終了後に川に流すのがしきたりとなっているが、現在は河川環境保全の関係で禁止されており、流せなくなっている。この、川に流すというしきたりも、川の生物への施しという意味があるという。

14:30 「光明真言和讃」唱和

最後に、出席者全員で、「光明真言和讃」を唱和する。この「光明真言和讃」とは、「光明真言」という経の功德を、解説している内容である。それぞれに、詞と節が記された紙が配られ、それを見ながら唱える。出席者の中には、内容を暗記している者も多い。

14:45 終了

最後に御詠歌が詠われ、住職が退場していき、終了となる。終了後、住職たちが供えられていた饅頭をおろし、出入り口で、手伝いの檀家の方により出席者に配られる。

今回の祠堂経には、約40名の人が参加していた。地域の参加者が大半を占め、その多くが毎年参加されているせいか、全体的に和やかな雰囲気の中で行われていた。Cさんによると、この祠堂経には、法華寺の檀家だけでなく、町野郷結集に属する他の寺院の檀家も参加しているため、比較的参加人数の多い行事だそうだ。ただ、今回に限り梅佳代さんの参加点でイレギュラーな部分もあり、普段から参加しているわけではないような人も数名見られた。

7. 字柳田の寺院の問題

この節では、聞き取りや行事の参加から感じた現在の字柳田の寺院の存続という問題について記述する。

三つの寺院で聞き取りを行う中で、現在最も問題視されているのは、檀家の高齢化と、それに伴う減少であった。実際、Bさんによれば、経営が困難になり移転したという寺院も多く、行事に参加する人数も、年々減少しているという。実際、仏性寺での行事や、お参りに参加する人数も、以前は100人を超えていたようなものが、現在では40人も集まれば多い方、という話であった。行事の内容も、以前は準備に日数を要したものを、少しずつ省略、簡略化しているものが多いそうだ。そのため、現在では寺院の経営だけで生活することは難しく、光栄寺、法華寺の住職も兼業であり、仏性寺の住職も、定年まで兼業で働いていたという。

光栄寺、仏性寺の所属する教区、第八組においても、様々な教化活動を行っているが、それにも寺院の参加率が上がらず、参加者も固定してきているという問題がある。そういった経営の面での厳しさがある一方で、すべての仕事が減っているわけではなく、行事などにおいては昔と変

わらない仕事量がある場合が多く、そういった忙しさと収入のバランスからも、廃寺となる寺院が多いそうだ。教化活動などは今後も続けられていくが、改善の兆しは現在も見えていないそうだ。

8. おわりに

寺院経営は今後も厳しくなるようで、少子高齢化や過疎化に対してどれだけ対応ができるか、ということに加えて、今後の寺院経営の改善には、行政の側からの限界集落に向けての対策が必要となるのではないかと思います。また、寺院に求められているものも、今までの宗教的な意味以上に、地域のコミュニティ形成に関わる意味などから、教化活動の他に、地域住民の集まる場としての存在が必要になるのではないかと思います。

今回の調査では、三つの寺院の方々や、檀家の方には、お忙しい中にも関わらず丁寧な対応をいただきました。深く感謝いたします。今後も、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。